

若草歌壇

—明日香 2009 秋篇—

若草読書会



智麻呂

恒郎女

凡鬼

景郎女

謙麻呂

恵郎女

小万知

祥麻呂

香代女

和麻呂

槇麻呂

和郎女

リチ女

修家持

修山頭火

若草歌壇・明日香2009秋篇

(2009年11月28日夜、飛鳥祝戸莊大津の間に集ひて詠める歌53首ほか)

○景郎女が作れる歌10首

ひのくま ほと あるじ み せ
檜隈の 流れの辺り 愛想良き 主の麵亭に 入りて憩はむ

都より 凱旋せしか 阿修羅像 賑ひ勝る 奈良に戻りて

しず て ら 系 ま めく
閑やかな 興福寺の御堂に 在りてこそ 微笑へる阿修羅 近しく温し

萬葉の 野に一本の 白桔梗 草の根運動 つづけし友よ

白式部 実はむらさきに 揺るる寺 車椅子押し 翁はゆるり

萩こぼる 新薬師寺に ジャズ流れ 藍増す空に 月のぼりゆく

若き日の キャラバンシューズ 履きて行く 熊野古道の 根方踏みつつ

薬師寺の 山門過ぎて 路入れば 母と子の家 小さくありぬ

あ せ び と ほ め
馬酔木咲く 森を往きては 戻り行く 杳き日ありて 鹿の瞳やさし

明日香路を むかし乙女や 男らが 銀輪でゆく 家持どのに 先導かれつつ



(「明日香の道」智麻呂)

○凡鬼が作れる歌11首

(戯れ歌)

明日香より 飛鳥へ移る 道ゆきは 瑞穂の国から 日の本となる

(飛鳥讃歌)

いにしへ 昔の ^{うたびとたた}歌人称へし この飛鳥 ^と永遠に ^は倭の ^{やまと}心なりけり



(飛鳥・明日香を詠める歌)

^{いほり}庵への 飛石たどる 路すがら 水琴窟は 鳥の巢思ほゆ

明けぬれば 日の出ながむる 甘樫に 乱れし萩の ^{かほり}香たなびく

(大和三山に寄せる歌)



(大和三山遠望)

^{ますらを}益荒男も ^{をとめ}乙女も ^め愛でし この紅葉 畝傍の森を 今しも飾る

香具山に 願ひをかけし ^{をとめ}乙女子は 恋の ^{やっこ}奴に ^{むだ}抱かれてをり

耳成は 北にありせば うそ寒き こと多くして ^{いま}未だしそねむ

(雑歌)

甘樫と 聞けば心の ときめけり ^{いにしへびと}古人の 水の都よ

^と外つ国の 人も住みける この明日香 争ひごとの 絶ゆらく願ふ

^{やまのべ}山辺の 道のもみぢ葉 色深み 太古流れし 血をも見るかも

敷島の 道おろそかに すまじきや 万葉人の ^{たつき}生活の糧ぞ

○謙麻呂が作れる歌 2 首

^{てらうち}寺内の 町並み静か 時過ぎて いにしへ膳に こころ落ち着き

蘇我の名を 今にやのこす 井戸ひとつ 寺の内外の ^{うちと}町の静けき

○恵郎女が作れる歌 4 首

^{こうとう}向冬の 飛鳥路めぐり 石舞台 残る紅葉の 色のさやけし

ハラハラと 風に乱舞す おち葉踏み 塚めぐり行く 晩秋の里

飛鳥人 しのみめぐれる 大和路の ^{あきいろ}秋色に染む ^{いにしへ}古の里

収穫を よろこび集ふ 子らの顔 さんびの声の 聖堂にひびく



(「明日香の花たち」智麻呂画)

○小万知が作れる歌 4 首

^{よそほ}粧ふや 車窓の二上 ^{ふたかみ}秋深み ^{みこ}皇子安かれと ^も思ひつつや行く

石だたみ 散れるひとひら ^{ゆふもみぢ}夕紅葉 キラリと ^{われ}吾に 輝き笑みぬ

夕映えに 友を誘ひて 落ちゆく紅葉 ^は今宵語らむ 思ひのたけを

秋空に ^{あけび}木通ざくろの 大笑ひ つられ^{われ}吾もや 大口開けぬ



(「アケビ」智麻呂画)

○恒郎女が作れる歌 3 首

年忘れ ^{あひ}相や集へる 麻呂と媛 心ホカホカ 祝戸の夜
紅葉散る なごりの秋の 夜はふけて 智麻呂ご機嫌 若草の会
キトラ展 家持^{あやこ}父子に 迎へらる バーバリーチェックの 帯し結びて

○和麻呂が作れる歌 2 首

(若草読書会に寄せる歌)

秋の日や 若草集ふ 明日香野に 過ぎし盛りの また帰来む
(飛鳥を詠める歌)

飛ぶ風の 真弓の丘に ^あ吾が来れば ここだも鳥の 声のかなしき

○横麻呂が作れる歌 6 首

富士の山 照り輝きぬ 夕映えの 高尾の山の 秋深みかも
はるけくも 富士の高嶺に 入る夕日 なほしぞ照らす 高尾の秋を
夕暮れの ^{もみぢば}黄葉うつす ^{たかあさん}高尾山 ^{くれ}暗ゆく道を 急ぐは我が
みわたせば 関東平野 夕暮れて 遠き明かりは 新宿ならむ
西山に 沈む夕日を 眺むれば ほのかにともる 京の町の灯
寄り添へば 色深みかも ^{もみぢ}紅葉の 永観堂は 二人行く道

○和郎女が作れる歌 1 首

はらはらと 舞ひ散り落つる もみぢ葉の 妹し思はる 秋ぞかなしき

○祥麻呂が作れる歌 2 首並びに俳句 2 句

すずかけの 落ち葉舞ひ散る 公園を 君としゆけば 光り輝き
夕暮れの コスモス咲ける 野辺行きて 穏やかなれる 時や過ぐさむ
秋高し 天平の薨 よみがへる
秋かぜに 阪神タクシー さびしさう



(「金柑」智麻呂画)

○香代女の作れる歌 3 首並びに川柳 3 句

若き日の 青年会の 集まりに 昔ぞ偲ぶ 我が姿あり

ひらひらと 幼き頃の 思ひ出の 明日香の里は 父母^{ちちはは}眠る

過ぎし日の 永遠^{とこは}の思ひ出 明日香路は たぐひて背子と 行きし道なり

もう師走 落ち葉ハラハラ 赤ら顔

夢あらば 生きるすべてに 悔いはなし

太陽の 昇る明るさ 勇気なり

○修家持の作れる歌 7 首

(明日香に寄せる歌)

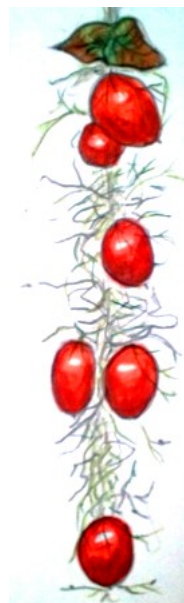
夕されば 多武^{たぶ}の山々 日に燃えて もみぢ散るらし 明日香風吹く

明日香川 明日^{あす}は相見む もみぢ葉の 散らずあり待て 吾^あが行くまでは

(秋に寄せる歌)

をしか
さ雄鹿の 鳴くや明日香の 夕暮れは 人ぞ恋しき 色に染み行く

たまづさ
玉章の 熟れゆく赤き 実のふたつ たぐひて秋の 妹と来し道



(「カラスウリ」左：智麻呂画、右：恒郎女画)

(若草読書会に寄せる歌)

若草も もみつやいつし 草黄葉 日をや重ぬる それぞれの秋

(明日香・飛鳥を詠める戯れ歌)

あさかげ ひにけに寒し 秋の香の 恋しと思へど 銭のあらなく (無銭法師)

あまと 天飛ぶや 軽の山道の 呼子鳥 鳴けど妹なく もみぢ葉散れる (柿本修麻呂)



(別途、紙上参加にて、作られたる歌3首ほか)

○リチ女が作れる歌2首

飛鳥寺は 赤きカンナの花盛り 木陰に憩ひし 思ひ出はるか

風受けて 空駆けゆける 魔女にもが 飛び降り立たむ 吾も集ひに

○修山頭火が作れる歌1首並びに俳句3句

(大阪城京橋口にて)

難攻の 太閤築く 石垣も 秋とどめかね 銀杏攻め入る

(白山スーパー林道にて)

越と美濃架ける 天空の道 滝つづく

(一乗谷朝倉家遺跡にて)

戦国の 戦忘るる 静けさよ

(朝倉家遺跡奥のそば屋にて)

山里の 秋に踏み入り 蕎麦笑ふ

(津堂城山古墳にて)

王の墓 河内に浮かぶ こぶにも運 (墳不運)

(白峰総湯にて)

亡き友と 交はししボトル 湯気遙か

